

「枕草子」のひとつの魅力

「枕草子」の世界が感じさせる魅力のひとつ、今、その感覚の鋭さに焦点をあて、「枕草子」の魅力について考えてみたい。

まず、嗅覚の面からみてみよう。

正月一日、三月三日は、いとこうらかなる。

五月五日は、くもりくらしたる。

七月七日は、くもりくらしして、夕がたは晴れたる空に、月いとあかく、星の数もみえたる。

九月九日は、あかつきがたより雨すこしふりて、菊の露もこちたく、おほひたる綿などもいたくぬれ、うつしの香ももてはやされて、つとめてはやみにたれど、なほくもりて、ややもせばふりおちぬべくみえたるもをかし。(一〇段)

五節供それぞれにふさわしい天候をあげている。清少納言は何故このような天候を選んだのか。正月一日が晴れわたるのが良いという気持はわかる。より一層晴れやかさが増すだろうから。三月三日も、いかに春らしく、ポカポカとした天気の方がどやかな感じがして良いだろう。七月七日には、日中は曇っていて夕方に晴れる

岡 廣 美

のが良いと言う。なぜなら、その夜の星の祭りは非常に待ちこがれられているものであり、日中からよい天気だというより、曇っていてみんなの気をもませ、人々の心を昼のうちから空に引き付けておこうとするのであろう。そして夕方に晴れたことにより、祭りを迎える喜びが倍加されると考えたのである。九月九日は重陽の節供で、この日菊花の香を真綿に移し、それで老を拭い去る信仰があった。だから、あけ方の雨はそのきせ綿をしっかりと濡らすためのものがある。

ここで注意したいのは「五月五日は、くもりくらしたる」と九月九日の「なほくもりて、ややもせばふりおちぬべくみえたるもをかし」というところである。この点に関して田中重太郎氏が「嗅覚は湿度によつて感じ方がちがう。からつと晴れた日よりもどんよりと曇っている日のほうがにおいが強い。それは、日のあたらぬ部屋にこもっているとき、狭い病室にお見舞の花があるときなどにだれもが経験せられたことであらう。この段の清少納言の好みもそれによつていられる。あの強い菖蒲の香やふくいくとした菊のかおりをその湿度

の強さにおいて、とらえているのだ^(注)と説かれている。ここを嗅覚の面からとらえられたのはさすがである。

確かに清少納言は湿気と嗅覚の関係を感じ取っていたらしい。

五月の長雨のころ、上の御局の小戸の簾に、齊信の中將の寄り給へりし香は、まことにをかしうもありしかな。その物の香ともおぼえず、おほかた雨にもしめりて、えんなるけしきの、めづらしげなきことなれど、いかでかいはではあらん。またの日まで、御簾にしみかへりたりしを、わかき人などの世にしらず思へる、ことわりなりや。(二〇二段)

この段の「おほかた雨にもしめりて、えんなるけしき」というところははっきり表現している。

したがって、田中氏の言われるように一〇段の五月五日と九月九日の天候は嗅覚によって選ばれたに違いない。そして九月九日の、どうかすると雨が降りそうなものもおもしろい、というのは嗅覚の面と共に、そうした暗い情景の方が菊の花が他の草木より鮮かに浮かびあがって見えるからではないだろうか。こうして、この段から清少納言の嗅覚はそうとう鋭いものであったと言えそうだ。

なお、この段に書かれている季節と天候の関係は「枕草子」を通じて一貫したものである。たとえば、

節は五月にしく月はなし。菖蒲・蓬などのかをりあひたる、いみじうをかし。(中略)

空のけしき、くもりわたりたるに、等々。(三九段)

といったぐあいである。ここで言う菖蒲や蓬は端午之節に邪気をは

らうために用いられたものである。共におい高い植物で、この草子にもよくとりあげられている。

蓬の香に關しては、牛車に押しつぶされた蓬の香が、牛車の輪の回るのにつれて鼻先にブーンとおおつてくるのがおもしろいところがある^(注2)。蓬によつて五月のさわやかな野のかおりを、また「輪の廻りたるに、近ううちかかりたる」ととらえている点が、牛車の動きをも感じさせて鋭い。

そして次の段は五月五日の日の菖蒲の名残りである。

五月の菖蒲の秋冬過ぐるまでであるが、いみじうしらみ枯れてあやしきを、ひき折りあげたるに、そのをりの香の残りてかかへたる、いみじうをかし。(二三〇段)

しろっぽく枯れてしまっている菖蒲をひき折って取りあげた、とその時、ぽつとかすかにあの五月ののりの香が漂った。それが実にいいと言う。かすかな菖蒲の残り香を味わっていると共に、こんなに枯れてしまっているのにまだにおいが残っていたのかという以外さへの、かすかな驚きに似たおもしろみも感じている段である。

残り香といえば、清少納言は

よくたきしめたる薫物の、昨日、一昨日、今日などは忘れたるに、ひきあげたるに、煙の残りたるは、ただいまの香よりもめでたし。(二二二段)

として、薫物においても余香を好んでいる。薫物は当時盛んに行なわれ、このように香炉でたき、伏籠の上に衣をかぶせてその香をしみ込ませたりした。

といったくあいである。ここで言うう菖蒲や蓬は端午之節に邪気をは

み込ませたりした。

こころときめきするもの（中略）

かしらあらひ化粧じて、かうばしうしみたるきぬなどきたる。ことに
見る人なき所にて、心のうちはなほいとをかし。（一九九段）

と清少納言をして言わせる程、十分にたきしめた衣の着心地はまた
格別であつたらしい。誰と見ると見る人がなくとも、と言うところ、
古今を問わない女性の心理を言ひあてている。また、薫物を香炉で
空だきして空中一面に漂わせる方法もあつた。この方法においても、
火取に火深う埋みて、心ぼそげにはほしたるも、いとどのやかに、
心にくし。（一九三段）

とあるように、ほんのりとおわすのが奥ゆかしいと感じている。
こういつた余香やほんのりと漂う香を好むという感覚から、奥ゆ
かしさを感じるが、このことから嗅覚が特に鋭かつたとは言ひ
がたい。なぜなら、当時少し心ある人ならばこういつた好みは当然
のことだったのであるまいか。かつて安田章生先生が「平安の人
々はかおりをかぐということにも美を感じていた」とおっしゃつた
ことがある。これこそ平安王朝の美意識とするところであらう。こ
れに比べて現代人があまりにもかおりに疎くなりすぎているのであ
る。清少納言もこの時代の人であり、この程度の嗅覚で普通だつた
と言へるだらう。

だが次にあげる「もの」の香は平安王朝の美意識とは少々類が異
なっている。

七月ばかりに、風いたうふきて、雨などさわがしき日、おほかたいと
すずしければ、扇もうちわすれたるに、汗の香すこしかかへたる綿衣

のうすきを、いとよくひき着て晝寝したるこそをかしけれ。（四四段）

八九月ばかりに雨にまじりて吹きたる風、いとあはれなり。雨の脚横
さまにさわがしう吹きたるに、夏とほしたる綿衣のかかりたるを、生
絹の單衣かさねて着たるも、いとをかし。この生絹だにいと所せく暑
かはしく、とり捨てまほしかりしに、いつのほどにかくなりぬるにか、
と思ふもをかし。暁に格子・妻戸をおしあげたれば、風のさと顔にし
みたるこそ、いみじくをかしけれ。（一九八段）

共に汗の香をとりあげている。ここで注意すべきことは、「汗の香
はいい」と言っているのではない。暑かつた夏も過ぎ、そろそろ秋
近くなつた雨の日に、汗のにおいのする綿衣をひきかぶつて昼寝を
した、そのことが実にいいといふのである。暑い暑いと言つて汗を
流した日々であつたというのに、今では汗などひいてしまひ、涼し
くさわやかな昼寝を楽しんでいるという。汗の香はその変化をおもし
ろがっていると考えてはどうだろう。汗の香はその変化を身近に伝
えるものとしてとりあげられたのではないだろうか。

この汗の香と並んで、よく「清少納言の異常な一面」などと言わ
れてあげられるのが次の鞞の香の部分である。

いみじう暑きころ、夕すずみといふほど、物のさまなどもおほめかし
きに、男車の前驅追ふはいふべきにもあらず、だだの人も、後の簾あ
げて、二人も、一人も、乗りて走らせ行くこそすずしげなれ。まして、
琵琶かい調べ、笛の音など聞えたるは、過ぎて往ぬるもくちをし。さ
やうなるに、牛の鞞の香の、なほあやしう、嗅ぎ知らぬものなれど、
をかしきこそもの狂ほしけれ。

いと暗う闇なるに、前にともしたる松の煙の香の、車のうちにかかへたるをかし。(二三四段)

ここでは文中の「さやうなるに」という語に注意したい。たいそう暑い夜、夕涼みに牛車を走らせている、そんな折には牛の鞞のにおいの、どうも妙でかいだことのないものだけど、また一興だと感じるのである。部屋で、几帳の中に座っている時に感じるのではない。ふとブンとにおってきた鞞の香が、蒸し暑い闇の中で牛車に揺られている気分を一層盛りあげ、いかにもその場の情景にふさわしいのではないかと感じたのである。

野中にあつても、シャネルの五番あたりを漂わせて楽しんでるような人はいったいどんな神経の持ち主だろうと疑いたくなる。少し極端だが、いなかに行けばいなかの香水もまたいいものだ。清少納言のこの鞞の香は、これと同じ感覚なのではないだろうか。

平安王朝の人々は、いついかなる時でも美しい薰物などの香がふさわしいと感じたのだろうか。それが貴族的の美意識といわれるものなのだろうか。いくらどのような環境で育とうとも同じ人間、人間の感覚にそう大差があるわけではない。わずかなものに注意をむけるか、むけないかが、感覚の受け取り方の違いとしてあらわれるのではないだろうか。清少納言は、その場に応じた、最もふさわしい香に注目しているのである。これを「異常だ」ときめつけてしまうのはあんまりな気がする。

清少納言はその場の情景に最もふさわしい香を、ふとした経験の中から実に巧みにとりあげる。この段の松明の煙の香もその一つで

あり、夕涼みにはふさわしい香であろう。また、

清水などにまゐりて、坂もとのぼるほどに、柴たく香のいみじうあはれなるこそをかしけれ。(二二九段)

というの、清水にお参りに行った時の柴のたく香であるからして、心情とあいまってたいそう身にしみ、いいものだというのである。

こういつた、その場にふさわしいものを鋭く見つけて選び出す、いわゆる選択眼の巧みさ鋭さがここにある。そして、それは嗅覚にかぎったことではなく、他の感覚においてもみることができよう。

視覚において最たるものはあの巻頭の部分である。清少納言がこの草子を書いたその時点まで、ずっと見つけてきた四季の自然や生活の中から、あきれほど端的にその季にふさわしい情景を選び出している。

また、

四月のつごもり、五月のついたちの頃ほび、橘の葉のこくあをきに、花のいとしろう咲きたるが、雨うちふりたるつとめてなどは、世になう心あるさまにをかし。花のなかよりこがねの玉かと見えて、いみじうあざやかに見えたるなど、朝露にぬれたるあさばらの櫻におとらす。(三七段)

橘の美を述べているのだが、この場面設定に注意したい。季節と天候と時刻が肝心なのである。四月の終り頃か、五月の初めであるから、花が咲き、実もなっている。だから葉の緑、花の白、そして実の金色という色彩美が成立する。雨で早朝ということが、後の朝露に濡れたあさばらの桜の美との対比を可能にし、また雨に濡れ

中から実に巧みにとりあげる。この段の松明の煙の香もその一つで

露に濡れたあさばらけの桜の美との対比を可能にし、また雨に濡れ

ることによって、色彩がより鮮かさを増している。こうした場面設定が橘の美の極致を演出しているのである。

「枕草子」中最高の演出として絶妙なのは次の段であろう。

月のいとあかきに、川を渡れば、牛のあゆむままに、水晶などのわれたるやうに、水の散りたるこそをかしけれ。(二三二段)

川の流れと牛車そして月光が織り成す美の世界である。牛のあげる水しぶきに目をとめることにより、清少納言が「水晶などのわれたるやうに」と比喩しているごとく、月光の透明感と輝きが一層強調されている。ゆつくりとした牛の歩みに伴って、水から生まれては水に消えてゆく月光の輝きが、スローモーションフィルムで見えるような感を有して眼前に浮かんでくる。大養廉氏は「水晶の割れる比喩は音感を伴って妙」^(注3)と述べられる。確かに水晶の割れる比喩は音感を伴っているが、決して水晶の砕ける音ではない。耳に聞こえるのは、牛車によって水が飛び散る音に他ならない。

また次にあげるのは炭火の世界である。

額髪長やかに、面やうよき人の、暗きほどに文を得て、火ともすほども心もとなきにや、火桶の火をはさみあげて、たどたとしげに見るたるこそをかしけれ。(二九四段)

現代において炭火の明るさを知っている人はどれほどいるだろうか。炭火すら見る機会の少なくなつた今、その暖かみは知っていても、明るさとなるとふと考えなくてはなるまい。だが当時の生活環境では、あの炭火のほのかな明るささえ「あかり」として目にとまるものであった。この段はまだ暗いうちに文を受け取り、灯をと

もす間も待ち遠しいのか、火桶の火をはさみあげておぼつかなささうにそれを見ている場面である。はさみあげられた炭火によって闇の中にかすかに浮かびあがるものは何か。垂れる、長く美しい額髪、そしてかすかにはほを紅潮させているであろう美しい顔。ここに至って、炭火の世界は完璧な美の世界となるのである。

こうした選択眼は実に鋭い注意力によってささえられている。その例として次の段が考えられる。

人の顔に、とり分きてまじと見ゆる所は、たびごとに見れども、あなをかし、めづらしとこそおほゆれ。繪など、あまた見れば、目もたたくすかし。近う立てたる屏風の繪などは、いとめでたけれども、見も入れられず。

人のかたちはをかしうこそあれ。にくげなる調度の中にも、一つよき所のまもらるるよ。みにくきもさこそはあらめと思ふこそわびしけれ。(二七一一段)

“生きている”人間の顔の美しさを十分に見ぬいている。この人の顔に対する考え方は池田亀鑑氏が「この作者の感じている人間の美は人形のような整つたものではなく、何か一つの美点が全体を覆うという意味のものであり、同時に一つの欠点も全体に関係するものだと述べているのである。非常に近代的な見かたである」^(注4)と要説されるころであり、この段からいかに清少納言が自由な眼で的確に、また現代的に鋭く物事を見つめていたかがわかるだろう。

聴覚の面では次の段が一考されよう。

宵うち過ぐるほどに、しのびやかに門たたく音のすれば、例の心知り

の人來て、けしきばみ立ちかくし、人まもりて入れたるこそ、さるかにをかしけれ。

かたはらにいとよく鳴る琵琶のをかしげなるがあるを、物語のひまひまに、音もたてず、爪弾きにかき鳴らしたるこそをかしけれ。(一九三段)

この場における爪弾きの琵琶の音は「この一篇に余情と陰影を添えたもの」^(注5)と池田氏が指摘されているように、こうした場面に実にふさわしいものと言わねばなるまい。「音もたてず、爪弾きに」としたところ、心にくいまでの配慮というべきだろう。

また「あはれなるもの」のうち

九月のつこもり、十月ついたちのほどに、ただあるかなきかに聞きつけたるきりぎりすの聲。(中略)夕ぐれ・あかつきに、川竹の風に吹かれたる、目さまして聞きたる。また、夜などもすべて。(一一九段)

という箇所がある。「日入りはてて、風の音むしのねなど、はたいふべきにあらず」^(注6)という虫の音も聞く時期によつては「あはれなるもの」としてとりあげられる。初冬ともいえる頃、今にも消え入りそうにかぼそく鳴っている虫の音は、秋の最中に聞くのと違ひなにかしら命のはかなさを感じさせよう。川竹の風に吹かれる音も、夕暮れや暁また夜などに耳にすると、しみじみとした人生の寂しさを思わずにはいられない。耳にする時の環境の違いによつて、もの音一つでも感じ方受けとり方が大きく違ってくることを示している。

なお、

あそびは夜。人の顔見えぬほど。(二二四段)

という段がある。真に音楽を味わうには視覚は働かせない方がよい。全身の神経を耳だけに集中さすのである。清少納言はそれを知っていた。特に「人の顔見えぬほど」としたところがいかにも清少納言らしくておもしろい。美男ならまだしも、つまらぬ男が演奏していたのでは聞く気もなくなってしまうのであろう。

このように聴覚においても、その時々に適した音を取りあげていく。このためには、火桶に立てるひばしの音のようなかすかな音にさえ注意を払っている^(注7)。そうして得た数限りない音の中から最もふさわしい音が、清少納言の耳に聞こえてくるのである。

また、清少納言は蚊の羽風を感じる程触覚に敏感であつたらしい^(注8)。「あてなるもの」の

いみじうつくしきちこの、いちごなどくひたる。(四二一段)

というところにも、膚の白さといちごの赤さという色彩感にも増して、小供のむっちりとしたやわらかな膚といちごの触覚の取り合わせが強く感じられる。さらに前にあげた一九八段の「暁に格子・妻戸をおしあけたれば、嵐のさと顔にしみたるこそ、いみじくをかしけれ」というところは、初秋の季を触覚で感じ取つており、訴えるところが強い。

以上のように、嗅覚から視覚、聴覚、触覚に至るまで鋭い選択眼が光っていると見える。「枕草子」中「ものづくし」の段はこの選択眼そのものに他ならない。

また、この選択眼的的確さ鋭さが風巻景次郎氏をして

「枕草子」における叙景には、季節、天候、時刻の配合の緊密に結び

あそびは夜。人の顔見えぬほど。(二二四段)

ついでに特色である。にもかかわらず、その季節なり時刻なりは、経過しつつあるところの具体的な時間であるのではない。そうではなくて諸種の条件がある一定の事情のもとに結合された短少なる時間の断面である。ある一瞬を切り取って固定せしめ、そして永遠化した静止である。

といわれしめるところである。が、選びとるといふ行為の結果、あらわれるところは氏の言はれる「短少なる時間の断面」となるのであるが、「ある一瞬を切り取って固定せしめ」と簡単に言い切れない。氏の言い「切り取る」とは、すなわち撰択するということなるだろうが、出来あがつたものは「ある一瞬」となる前には「膨大な一瞬」が存在するのである。自然をまた事物をあらゆる方面から、あらゆる環境のもとで逐一観察し、その結果得られた膨大な一瞬一瞬の中から、清少納言独自の鋭い感覚によって丁寧に選び出されたものが、「ある一瞬」となるのではあるまいか。したがって選び出されるまで、清少納言の感覚の中でとどまっている「間」がそこにある。

清少納言の心の中でゆっくりと選びとられているこの「間」によつて、いかにもやわらかな味わいが生まれてくる。また時としては、病気に苦しむ女性を、その苦しみを排除してその情景や女性の美のみを描くといつた「冷たさ」さえ生まれてくるのである。いわゆる唯美的傾向が強くなってくる。また文体も、感覚が選ばれる間におのずと練りに練られて、効果的な無駄のない文体として表現されている。一言に、その一言を取り出すために要した幾千の事物や情景が

奥に潜んでいると考えてはどうだろう。

そして、こうして選び出したものが、他の人が感じるところとは異なっている、あるいは他の人は少しも感じていないことを知っていて、それがまた清少納言にはおもしろいのである。たとえば前述の、鞆の香がおもしろいなどと感じる自分を、他の人と比べてみて気遣いじみていることだなどと言って、おそらくケラケラと笑っていることだろう。

また、雨あがりの庭において、雨のしずくで重そうにうつむいている萩の枝が、しだいにしずくが落ちて、人が手を触れもしないのにサワツと持ちあがる。そういつたおもしろい様子などが、他の人にとってはまったくおもしろくないことだろうと思う、とそれがまた「をかし」と言う。

さらに定子が主上への返事の手紙を紅梅の薄様に書かれた時、それがお召し物と同じ色なので良くつりあっていると感ずる。が「なほ、かくしもおしはかりまゐらす人はなくやあらん」と惜しいことだと嘆いている。この場合も他の人と自分の感じ方の差に気が付いており、一層目を輝かせて、その美しさに見入っている感がある。

これらは池田亀鑑氏が「発見せられたる眞實自身が、美的感情の動因となったからである。発見したるよろこびは、創造のよろこびである」と言われる境地に他ならないだろう。ここに読者は清少納言と共に、まったく新しい美の世界を垣間見ることができ、その喜びをも共に味わうことができるのである。

ところで与謝野晶子は「清少納言の事ども」において次のよう

に書いて(注14)。

この官能の鋭敏ということは清少納言一人に限られた長所ではなく、平安朝の貴族社会を通じての特色ではなかったか。(中略)清少納言がかくまで多く官能的の叙述をしたのは、やがて当時の交友がみな作者と同じほどに鋭敏な感覚をもっていて、互に理解ができた証拠である。(中略)「源氏物語」や「紫式部日記」を読むと、清少納言のもっていたほどの官能は、紫式部にも同じように働いているの気がつく。ただし紫式部は、その鋭敏な感覚をそのままに打出ださずに、かの大作の各処に必要に応じてちりばめて出している。それが紫式部のえらいところである。清少納言はただその感覚のみを集めて出したから一見読者の注意は惹くが、これをしばしば読めばその単調なのに飽きにくる。作者の長所は作者の短所をむきだしに示したものと見られる。清少納言はその四圍の刺激に対し、ほとんど反動的にめまぐるしく、「をかし」「めでたし」と発言するのみで、静かに内観し、もしくは内部の自己をさへ悠然と客観する余裕がなかった。これが紫式部のごとき大作の出来なかつたゆえんではないか。

前にも述べたように官能の鋭敏さのみを考えれば、清少納言は當時としては特に取り分けて敏感というほどでもなかつたかもしれない。そして当時の人々が難なくこの草子を理解できたろうことも事実である。が、理解できたからといってその作者と同等だとは決して言えないし、この草子を読んだ当時の人々が「はづかしき」と評していることも考え合わすべきであろう。単にありきたりなことをだらだらと書いたものであつたなら、このように評されることもな

く、その人々に書き写されてこうして今に至っていることもなかつただろう。結局選択眼の鋭さが当時においても秀でていたといえないだろうか。

また「しばしば読めばその単調なのに飽きぐる」とは明らかなる見解の相違である。久松潜一氏は「枕草子」という作品はいつ読んでも新鮮さを失わ(注17)ない」と述べておられるが、まったくそのとおりであり、読む度に何か新しいのがみつかる草子である。清少納言は晶子の言うように盲めつぼう書き散らしているのでは決してない。またここでいう「源氏物語」と「枕草子」との自然描写の違いは、既に多くの人々によつて論じられているところであるが、一言で言えば「源氏物語」での自然は背景としての自然である、ということであろう。晶子の「必要に応じてちりばめ出している」と言うところであつて、これに反して、清少納言は自然を自然のみとして描いているのである。晶子は「それが紫式部のえらいところである」などと書いているが、はたして紫式部に清少納言ほどの選択眼があつたかどうか。そして「枕草子」のごとき文体の草子が書けたであろうか。すぐれた詩人と小説家の優劣は所詮考えられないことである。清少納言によつて創造された美の結晶とも言うべき「枕草子」。そこに光る、鋭い注意力と感覚によつて支えられたはずぬけた選択眼こそ、今もつて読者をひきつけてはなさない、「枕草子」の大きな魅力のひとつではないだろうか。

註

だからだと書いたものであったなら、このように評されることもな

- 1 田中重太郎「枕草子の風土」(白川書院・昭40) 七二、七三頁。
- 2 「枕草子」二二三段。
- 3 大養廉「枕草子に見える感覚美」(『解釈と鑑賞』昭31・1所載) 八二頁。
- 4 池田亀鑑「全講枕草子」(至文堂・昭38) 四八七頁。
- 5 註4と同書 三九七頁の要説。
- 6 「枕草子」一段。
- 7 「枕草子」七六段と二〇一段。
- 8 「枕草子」二八段。
- 9 風巻景次郎「自然観照における新傾向の発生」(『枕草紙』)における自然観照の性質」(桜楓社・昭45「風巻景次郎全集第六卷新古今時代」所載) 五四頁。
- 10 「枕草子」一八九段と一九〇段。
- 11 「枕草子」一三〇段。
- 12 「枕草子」二七八段。
- 13 池田亀鑑「美論としての枕草子」(『国語と国文学』昭5・10所載) 一九二頁。
なお、引用文中のワキテンは池田氏がうたれたもの。
- 14 与謝野晶子「清少納言の事ども」(春秋社・昭42「与謝野晶子選集4晶子古典鑑賞」) 与謝野光・新間進一編 所載) 九七、九八頁。
- 15 「反射的」は「反射的」の印刷ミスか。
- 16 「枕草子」三一九段。
- 17 池田亀鑑「研究枕草子」(至文堂・昭38)の序。
なお「枕草子」本文の引用は「日本古典文学大系」所収本によった。

『愛聖』有島氏追憶号(大12・8) 目次

有島武郎に関する雑誌の追悼号、特集号等の目次は、角川書店「有島武郎集」(『日本近代文学大系』33)に掲載されており、また「復刻 或る女のグリンプス」(山梨英和短大)にも詳細な文献目録が付いている。しかるに前者には「愛聖」有島氏追悼号については全く触れられていず、後者では「伊藤証信編『有島氏追悼』号 愛聖第3号 大12・8」と記されているだけである。内田満氏の「研究文献私家版」は詳細をきわめている由で、多分「愛聖」も入っていると思われるが未入手で確認していない。内田氏の目録は、あまり一般的ではないようなので、「愛聖」の目次を念のため記しておくたい。

有島氏追悼号(『愛聖』第三号 大12・8・1 無我苑)

伊藤朝子「有島武郎氏を憶ふ」、伊藤証信「有島氏の本能的な生活と其情死」、原谷とよ「有島氏の死を聞きて(詩)」、伊藤朝子

「本能的な生活と自殺」、安藤現慶「有島氏と倉田氏の論争に就て」、十氏「読者の弔辞」

以上のほか口絵に「有島武郎氏の筆蹟」一ページがある。

(嘉部嘉隆)